

テーマセッション4

精神疾患をもつ利用者と家族の関係を刷新する訪問看護師の援助

千葉大学看護学部 COE 研究員	片倉 直子
千葉大学看護学部訪問看護学教育研究分野	山本 則子
千葉大学看護学部訪問看護学教育研究分野	石垣 和子

1. はじめに

精神疾患の利用者に訪問看護師としてかかわる際、その家族への対処に困難を感じるものが少なからずあります。利用者の傍らを離れず代わりに訪問看護師の問いかけに応える家族、利用者の能力に悲観的な家族、家族同士が精神疾患をもつ者である場合、など、病院でも在宅の場でも、家族の存在により看護師が悩まされることは少なくないと思います。その背景には、わが国では自明である家族の同一性を重視する思想、およびそれにもとづく精神保健福祉法による「家族＝保護者」の前提があるように思います。

このテーマセッションでは、訪問看護活動を切り口として、精神疾患をもつ利用者とその家族の現状を明らかにし、どのような目的で看護師が働きかけるべきなのかを考えます。

2. とりあげる研究

精神疾患をもつ利用者と家族に対する効果的な訪問看護の働きかけと、その働きかけの基盤となった目的を明らかにした研究を報告します。

【研究の概要】方法：調査時まで2年以上継続して統合失調症をもつ利用者(以下利用者)の在宅生活を支援してきた7人の訪問看護師に、半構造化インタビューと同行訪問を実施しました。利用者7人の訪問看護師の利用者と家族に対するかかわりと働きかけに関する情報を得て、効果的な訪問看護を<概念>化しました。

結果および考察：訪問看護師は<利用者のふつうの生活をしたいという願いを支える>ことを最終目標に据え、まず<I.利用者の意志表出に道を付ける>をめざし、利用者の意志が表出された後には、その意志を訪問看護師と利用者が共通の了解事項としたうえで、<II.利用者に必要な生活能力を育成する>をめざしました。IとIIの際、訪問看護師がその遂行の妨げになっていると判断したとき、利用者の家族関係に働きかけていました。訪問看護師は<家族関係を刷新する>ために、<①利用者の意志決定を中心とした家族へのかかわり>と<②家族と利用者が相互に自立した家族関係の再構築>をめざしました。①の実現のための具体的な訪問看護師の行動は、利用者の意志を潰さないようなかかわり方を家族に直接説明する、家族に同意を得つつ家族がいない場所で利用者と話をする、また②の実現のために、ディケアなどの社会資源を活用した利用者自身の時間と場所の確保、利用者の意志に伴う一人暮らしの希望への支援、利用者に高齢の親である家族が必要としていることを伝える、等を行っていました。訪問看護師は利用者に対する家族の保護機能を支える支援よりも、むしろ利用者にもともと備わっている生活能力を促す支援を目的として、利用者と家族の間に物理的・心理的距離をつくりだして行っていました。

3. 討論したいこと

本研究の訪問看護の展開は、高齢者を介護する家族の介護機能を挺入れする家族支援と異なっています。このような研究の結果を叩き台にして、皆様と精神疾患をもつ利用者と家族の関係への効果的な支援およびそれぞれの自立した生活の解釈、などについて意見交換できればと思っています。皆様のご参加をお待ちしております。お気軽にご参加下さい。